

(一社)兵庫県建築士事務所協会 会長

原田 敏文

集合知で 知恵をしぼる 多世代が 寄り添う共同体へ

2024年5月に、兵庫県建築士事務所協会の会長に就任した原田敏文さん。40有余年に渡り尼崎を拠点に株式会社原田建築設計事務所の代表を務める建築士であり、新会長の顔もあわせもつこととなった原田さんに、490(兵庫県下正会員352の建築士事務所・賛助会員132社・若手建築士で構成される準会員6名※2024年6月現在)もの会員をもつ兵庫県建築士事務所協会のこれからを伺った。

聞き手: 株式会社KUUMA 濱部 玲美(執筆)/株式会社文化工学研究所 北川 浩明



周囲に恵まれ生かされる 頼まれ上手のリーダー

原田さんにお話をお伺いしたのは、冷たい風の吹く11月の末。「自分のことを話すのは苦手で」と、少し緊張した面持ちでお話を始めた原田さん。まずはと、幼少期のことを尋ねてみると、もっぱら野球少年だったことを教えてくれた。小学校、中学校と野球を続け、周囲からの後押しでキャプテンを努めた際には、チームポジションの采配を行うこともあったという。



高校2年生で訪れた修学旅行での1枚

高校では、周囲に背中を押され生徒会に入り、2年生の春には生徒会長へ。学年関係なく集まる生徒の声を集め、先生に届ける橋渡しをする役割だったそうで、おかげで先輩にも後輩にも友達が多かったのだとか。

「でしゃばるのは好きじゃないんだけど」と、苦笑いしながらも、頼まれ上手の片鱗が見え隠れする。周りからの信頼とそのプレッシャーに応えてきたであろう原田さんの幼少期から青年にかけての生い立ちを聞き、いま兵庫県建築士事務所協会の会長であることにもつながりが見え、じんわりと心が温まった。



担任の先生と(高校2年生)

いろんな人がいる、 いろんな役割がある 丁寧に向き合えば、きつとうまくいく

厳格だった父の存在もあり、漠然と手に職をと技術職に就くことを考え、建築の道を選ぶこととなった原田さん。大学でも気の合う仲間にも恵まれ、高齢者施設を対象にした調査を行った際には、調査ヒアリングを行ううちに利用者と仲良くなり、内情や裏話を聴いたりすることもできたのは楽しい思い出なのとか。当たり前にある小さな出来事やそこにいる人とのつながりでしか、物事は動いていかない。「微に入り細に入り、です」と呟いた原田さんの言葉から、日頃から小さな事に気を払い身近な人たちと丁寧に向き合ってきたことをうかがい知ることができた。

卒業後は設計事務所で勤務した後、30歳で独立。いずれは自分で、と思っていたがタイミングが重なり、想定より早く建築設計事務所を立ち上げることとなった。

「よう終わらんと続いたなという気持ちです」という言葉に、建築業界のなかで様々な苦勞を乗り越え、経験を積んできたことを想像させる。

「若い人には、同じ苦勞をさせたくない。だからこそ個でバラバラと動くのではなく建築士事務所協会としてつながりあい、建築士事務所の社会的地位を上げていく大切さを感じているんです」と穏やかに話してくれた。

実践の積み重ねによる集合知が 予想もしなかったものを生み出す

建築士事務所協会にあるのは理想論ではない、数々の経験を積んできた建築士たちの実践なのだと話す、原田さん。建築士法に定められた法定団体だからということだけでなく、先人たちの数々の実践による集合知があるからこそ、「どうにか一緒に知恵を絞ってくれるのでは」と、県民行政から様々な相談を受けることも多いのだという。



設計事務所を開業して約1年後、長女、長男と。次男は未誕生。



兵庫県建築士事務所協会の事務所でお話をお伺いした

高経年マンション外観調査や耐震診断、建築無料相談会、空き家無料相談会、また弁護士や会計士など専門家と連携した相談会や紛争解決など、普段暮らしているとなかなか表に現れることのない、一見地道で日が当たらないように思えることだが、地域をつくる根っこの部分を



事務所開設後6年目の36歳頃。あるシンポジウムの討論者及びパネラーとして登壇した

協会として取り組んでいるのだ。これこそが良い建築が生まれ、残り続け、また新しい地域循環を生む土壌につながっているのだろう。

お話をお伺いしていると、建築士事務所というのは、自身の街を様々な尺度で見える信頼できるパートナーとしても重要な存在なのだと感じる事ができた。

あらゆる実践を積んできた、様々な年齢層が集まる、建築士事務所協会。建築士である前に、いち人間としてよりお互いを知り丁寧に関わっていくことで、より一層多世代が寄り添い集合知を使いこなす共同体となっていく。それが、思いも寄らない成果につながっていくのでは、と優しく締めくくられた。